
幸せな町の鍵屋

坊主狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せな町の鍵屋

【Nコード】

N4325P

【作者名】

坊主狸

【あらすじ】

村というには大きく、街というには小さい。
そんな町。

ある一人の鍵師はこの町を幸せな町にするべく奮闘していた。
彼が抱く理想の町、「誰もが常に笑顔を絶やさない町」
それは彼がこの町の祖父に預けられたときからの理想であった。
そして、その理想は徐々に叶えられつつあった……。

そして、雪の降るような寒い季節になった。

一面は白く、美しい雪に埋もれていた。

その中でも、人々の暖かさに当てられながら、誰もが笑顔でいる。

彼が目指した、理想の風景がそこにあった。

それを窓から見ながら彼は鍵をつくっていた。

あるとき、彼の家の窓を配達屋がたく、出向いてみると配達屋の後ろには、四組の家族がいた。彼らはこの町にふさわしい町の人になれるだろうか……。

彼の町づくりが始まる。

プロローグ（前書き）

まず、このページに来て下さった皆様、ありがとうございます。
あらすじやらを読んで、「この小説、読んでやろう。」と言う気持ちになりましたら、ぜひ続きを読んでくださいませ。

プロローグ

「なあぼうや、お前さんはこの町をどんな町にしたい？」

私の祖父は私が10歳の誕生日を迎えるとき、誕生日プレゼントを開けようとしている私に問いかけた。

私はプレゼントに夢中でそれどころではなかったのだけれども、祖父の問いかけなので手を止めて考えた。

5、6分だろうか、一生懸命考えた末に私は祖父に答えた。

「みんなが、楽しそうに笑っている町ならいいな」

その答えを聞いた祖父の顔は一瞬、驚いたような顔になったが、すぐに元のニコやかな顔に戻った。

「それは、確かにいいかもしれないね。みんなが笑っている町か…：ぼうやならできるよ。」

その祖父の一言はともうれしかった。

祖父がそう言ってくれるのなら、実現できるような気がしたからだ。「とめて悪かったね、さあ、プレゼントを開けてごらん。」

そういわれ、包みを破り、箱を開ける。

その中には一本の鍵があった。

子供心としてはおもちゃが入っていなかったことが少しばかり残念だった。

「これはなあに？」

「それは、心の鍵だよ」

祖父の目は満足そうであった。

「ぼうやはもう10歳だ、まだ10歳ではない。そろそろ鍵のつくり方を教えなくてはね。」

「もう、かぎしのしゅぎょうをしなくちゃいけないの？まだ、みんな遊んでいるよお。」

純粋な一言だった。まだ、隣のうちのケビンくんや、オードルくんはしごとをするのはまだ先だ。といっていたのだ。

そんなわがままを言ったとき、祖父は真剣な目つきで私に話し始めた。

「いいかい、ぼうや、人はね目指すものによってそれになるためにしなければいけない事があるんだ。それは目指すものによって修行を始める時期は異なるし、なにより、早ければ早いことにこしたことはない。ぼうやは、鍵師になって、この町を幸せにするんだろう？　だったら今からがんばらないとね。」

祖父の言うことが間違っていたことはなかった。今思っても、この言葉も間違っていないと思う。

「……うん、わかったよ、がんばるよ僕……。」

その一言に祖父はより笑顔になった。そして私の頭を撫で回した。

「おじいちゃんができなかったことを、成し遂げておくれよ、ぼうや。」

祖父はそうつぶやいた……。

プロローグ（後書き）

小説を書くのはほとんど始めてなので、生暖かい目でみてください
（^^;）

～余興～

季節は11月の半ば。

山の中にあるこの町は周りの山々と同じように白い雪で純白に染まっていた。

その雪は冷たく、暖炉が無くては凍死するほどに気温は低かった。

だが、この町は暖かった。

それは気温的な意味でもなければ、食べ物のことでもない。

心の暖かさである。

雪もふり、さらに静かになったこの町に、婦人たちの暖かい笑い声が聞こえる。

その声の方向の窓を見ると、そこには笑顔で雑談をする三人の婦人がいた。

（平和だ…）

感じずには居られなかった。

そんな暖かさをかみ締めながら、コーヒーを入れて客間の大きいソファ―に腰をかける。

私が、物思いにふけていると、玄関の横にある小さい窓をリズムカルにノックする手が見えた。

その黒い手袋はあまりにも見慣れすぎて、手を見ただけで誰だかわかってしまうほどだ。

「やあ、今日も配達ご苦労様。」

「はい、いつも町民の皆様には暖かい愛情を届けるこの町の配達屋でございます。」

玄関のドアを開けた先に居たのは、まだ20中盤の青年であった。

手には黒い手袋、服は、いかにも配達屋にふさわしい黒の長袖長ズボンである。

彼の後ろには、いつもの木でできた手押し車が置いてある。

彼は黒い帽子についた雪を払いながらきれいな黒髪をなびかせている。

「今日はパンと牛乳、あと肉を頼んでいたかな？」

「ええ、今日のお届けはそうでございます。」

そういうと、配達屋は牛乳を一ケース、パンと二斤、肉を600gほど、手押し車から持ってきた。

「これで間違いはありませんですか？」

「君に限って間違いというものはあるまい。」

そういうと、彼は、にしし、と目を細めて笑った。

彼の特有の深いえくぼが両頬に現れた。

「町長はすっかりお得様ですゆえ、これからよろしくおねがいします。」

「この町で、君のお得意様ではない人を見つけるほうが私は難しいと思うがね。」

それでは、っと、帽子を軽く頭の上に挙げて、彼は次の家へと向かった。

軽く朝食をとり、作業場へと向かう。

昼食時になり、手を休めて客間へともどる。

するとまた、玄関の横の窓がノックされた。

次は黒い手ではなく、しゅわくちな手だった。

「よくいらっしやいました。ランドリー夫妻。」

「ああ、今日も昼食をご一緒と思っていたたずねたのですが…迷惑でしたかな？」

彫りの深く、整った顔した老人が玄関に立っていた。

頭には、雪にも負けず劣らない立派な白髪が生えていた。

姿勢はしっかりとしていて、腰が曲がっていない。

過去に軍人として活躍していたからだろうか、そこに居るという威圧感があった。

「迷惑などではありませんよ。むしろ、到着が遅いので心配していたところです。」

「ふふ、町長様は、どこかの頑固親父と違って、寛大な心をもっていてうれしいですわ。」

そういいながら、ご老人の後ろからひょっこりと現れたのは、杖を片手に持った、凜とした老婦人だった。

頭はまだ黒く、団子のように髪をまとめ、つけている銀の眼鏡はいかにも知識人、といった感じである。

「メアリー、君は何十年立っても、変わらないな。」

老婦人、メアリーさんは手を口に当てて笑った。

「そういうあなたですよ、ケリー。」

そういい、老人、ケリーさんとメアリーさんはお互いの顔を見合い笑った。

「お二方とも、よくいらっしやいました。さあ、こちらのソファ―

でくつろいでください。」

悪いな、ありがとう、と二人ともお礼を述べて、座った。

「じゃあ、調理場を借りるわね、町長さん。」

「ええ、いつもすいません。」

メアリーさんが客間をでて、ケリーさんと二人きりになる。

「町長さん、今日、この町にいくつかの家族が引っ越してくるときいたんですが…到着はまだですかね。」

先に話を切り出したのはケリーさんだった。

「ええ、正確には三家族です。山の雪が予想以上にすごいので、おそらくこちらに到着するのは今晚になるでしょう。」

「心配ですな、なにか大事なければいいのですが…。」

「案内人は凄腕ですから、心配は要らないとは思いますが…、それに、配達屋も今日は町の入り口で待機しているとのことですので。」

そういうと、いくらか安心したのか、ケリーさんはコーヒーを飲んだ。

「それにしても、以前、町長はコーヒーがお嫌いといっていましたか…。」

「そうでしたか、私は覚えていませんが…。」

「ええ、たしか、三年前あたりに、私がコーヒーをご馳走し――」

「昼食ができましたよ。」

メアリーさんが調理場から出てきた。

「ああ、わかった、取りにいくよ。」

「手伝います。」

「今日も老いぼれの話し相手になってくれてありがとうございます。」

昼食を食べ終え、メアリーさんが帰り際にお礼をいった。

「いえいえ、こちらも一人身ですから、お二人が居ると楽しいですよ。」

「では、また明日うかがいますね。」

「お待ちしております。」

そういつて、メアリーさんとケリーさんは家へを帰宅した。

（やはり、人と過ごすのは楽しいものだ…）

少なくとも、作業の合間の当たり障りの無い会話は何かとリラックスできる。

（さあ、続きをはじめるか。）

作業場へと再びもどる。

今日の分の作業を切り上げ、夜の読書にふけていると、黒い手がおなじみのリズムで窓を叩いた。

「どうも、いつも町民の皆様にあかい愛情を届けるこの町の配達屋でございます。」

ドアを開けるといつもの深いえくぼの笑顔を浮かべた配達屋はそこに立っていた。

「夜の配達に頼んでいないと思ったのだが…。」

「ええ、ええ、そうですとも、今日はちょっとしたものを届けに参りました。」

配達屋の後ろを除くと、男女、大人子供合わせて九人がそこに緊張した趣で立っていた。

「彼らが例の、引越し人でございます。」

「なるほど、案内人はどうした。」

「早々に帰られました。報酬はまた今度でいいと。」

「今から帰ると…、こうも暗くなつては、彼らでも大変なのでは？」

「『帰る場所は近い』ので問題ないかと…。」

なるほど、私はうなずくと、彼らに簡単な挨拶をした。

私が話しているうちに警戒が解けたのか、少しほっとしたような顔をしていた。

「今日は、もう遅いのでこの配達人に家を紹介してもらって、もうお休みになられて結構ですよ。」

私が声をかけ終わると配達人は彼らの荷物を乗せた手押し車をひきながら、彼らを新しい家へと案内していった。

（また、町民が増えたか…。）

喜びや、なんともいえない感情が私の心を駆け巡る。

（彼らは、この町をより理想的な町に近づけてくれるだろうか…。）

私はそう考えながら、眠りについた。

〱余興〱（後書き）

誤字、脱字が多いかも知れませんが多めにみて下さい・・・（
人一；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325p/>

幸せな町の鍵屋

2011年2月23日01時15分発行